

## 講演

### 「ICUの教学改革—自発的学修者を育むリベラルアーツ教育—」

講師：日比谷潤子（国際基督教大学教養学部教授）

日時：2008年1月25日（金）14：00～15：30

会場：中京大学名古屋学会議棟1階大会議

**【照本】** 予定の時刻になりましたので、中京大学FD教育改革委員会と教養部将来計画委員会共催による講演会を始めさせていただきたいと思えます。

先に簡単にこの講演会の趣旨についてお話をさせていただきます。

例年、教養部将来計画委員会では教養教育の改革につながるような講演会を企画しているわけですが、2008年4月から我が教養部は国際教養学部として新しく出発することになります。したがって、これまで同様、全学共通教育に対する重責を果たすと同時に、新しい学部の専門教育についても存分に力を発揮していくという課題に直面しているわけです。そうした中で、今後私たちがどういふ形の教育研究を進めていけばいいのか、具体的にどんなカリキュラムデザインで、更にどういふ教育方法を新たに採用していけばいいのか等々、様々なことが議論になるかと思えます。そこで、特に将来計画委員会内の教育部会の先生方を中心に本日の講演会の企画を練っていただき、国際基督教大学で「教学改革本部長」の重責を担われている日比谷潤子先生に講師をお願いする運びとなりました。

本日の進行ですが、およそ60分程度、日比谷先生からカリキュラムデザインの原理であるとか、履修・修学支援のあり方や教育方法についてのICUでの取り組み、ないしは新しい改革の基本的な考え方等についてお話を伺って参りたいと思っています。

それから、時間の関係がありますが、30分程度の質疑応答という形で、更に詳しいことを教えていただこうかなと、そういう予定でいます。短い時間ではありますが、貴重なお話を聞けるものと大変期待しております。

申し遅れましたが、私は将来計画委員長をしております教養部の照本と申します。本日の司会を務めさせていただきますので、よろしく願いいたします。

本日の講演会には学長も並々ならぬご関心をお持ちですので、日比谷先生のお話を伺う前に、学長先生からのご挨拶をお願いいたします。

**【北川学長】** 今日は本当にお寒いなか、日比谷先生ありがとうございます。

実は、私はつい1年前までは一教員でございましたから、はっきり言ってあまりこういうことに興味がなかったのでございます。申し訳ございません。しかし、学長になっていろいろな会議に出るうちに、一番大きなインパクトを受けたのは、去年の8月末から9月にかけて教務系の私立大学連盟の教学担当者の合宿が2泊3日ございました。それに出まして、随分中京大学は遅れているなあと強く感じました。

その後、愛知学長懇話会、あるいは先週行って参りましたのは、京滋（京都・滋賀）の学長懇話

会、それから今週は私立大学連盟の学長懇話会、こういうものに全部出て参りますと、まあ他所の大学は大変に改革が進んでいる。中京大学も、私は今年で31年目になりますけれども、大変に発展した大学には違いありませんけれども、こういった教学面の改革というものは、本当にまだまだだなあと強く感じております。

来年度からぜひ具体的に動く形に持っていきたいと思っておりますので、今日ご参集の先生方のご協力もよろしくお願い申し上げます。

本当に重ねて日比谷先生ありがとうございます。

**【照本】** ではさっそくですが、日比谷潤子先生、ご講演をお願いいたします。

**【日比谷】** ご紹介いただきました、日比谷潤子でございます。本日はお招きいただきましてありがとうございます。ちょっと座ってお話させていただきます。

(スライド1)

いきなり消し忘れに気が付いてしまったのですが、このようなことであちこちでお招きをいただくものですから、お話をしているのですが、それぞれお招きくださったところの現状に合わせて多少内容を変えておまして、「中京はこれ」と書いてあるのはそういう意味なのですね。

「ICUの教学改革—自発的学修者を育むリベラルアーツ教育—」というタイトルでお話させていただきますけれども、「中京はこれ」だという意味ではなくて、このファイルは中京用ということでございます。内容はICUの取り組みについてお話したいと思います。

(スライド2)

写真がありますが、ICUにいらしたことがおありの先生はどのくらい、いらっしゃいますか。…お三方くらいですね。

これが私どものキャンパスの写真ですが、これまでこの写真を使って何度もお話しているのです。最近温暖化でこういう光景は見られませんが、一昨日はちょっとこういう感じになりました(スライド2左上)。東京で久しぶりに雪が降りました。

そして、私どもも新しい体制で始めるのは、今年(2008年)の4月になりますが、4月の初めの光景がこれです(スライド2右下)、こちらが入口で奥へ入って行く形で、大学の門から一本の道があるのですが、桜の名所ということになっております。

そして、こういう中で入学した学生たちは、これは図書館のコンピュータを使って勉強ができるようになっている部屋ですが(スライド2左下)、このように勉強して最終的には卒業すると(スライド2右上)、このようなことになっております。

(スライド3)

私どもの大学は、リベラルアーツ・カレッジとして出発いたしまして、今もリベラルアーツ・カレッジとしてやっているということです。

「日本でただ1つの本格的リベラルアーツ・カレッジ」と書いてあるのですけれども、どこがただ1つかといいますと、学部が中心であって、今は、ここもそうだと思いますが、国際教養学部とか教養学部、あるいは教養学科、リベラルアーツ学科というのが大学にたくさんできていますけれども、大きな大学の中の一部としてそれがあつ、例えば早稲田とかもそうですけれども、私どもは総合大学の中の1つの部門ということではなくて、これだけで、今は規模の小さい大学院を持っておりますけれども、基本的には学部教育のみを中心に行っている大学です。

## リベラルアーツ教育の理念

(スライド4)

よくご承知のことと思いますけれども、リベラルアーツ大学といわれるものが起こったのは、17世紀頃の欧米というような説がありますが、私どもの大学はアメリカから人が来て、日本人と一緒に協力して作ったということもありまして、アメリカの大学教育をある程度、これまではモデルにしてきたとあってよいかと思えます。

その特徴といたしましては、1つは文系・理系の垣根を超え、教養教育を重視したカリキュラムをとるとのこと。「教養教育を重視する」という非常に大きな柱は、あまり早いうちから専攻を固定しないというところにあります。

次に、少人数教育で代表的なリベラルアーツ大学と言われるところは、平均的な学生数が2000人から多くても3000人ですけれども、少人数教育を守っております。

それから、校内にあるということとは同じで、全寮制ではありませんけれども、寮は確かにありまして、それなりのパーセンテージの学生が学内にある寮に住んでいます。この付近はあまり都心のいろいろな刺激があるところではなくて、少し離れたところにあり、キャンパスの中に住んで大学に行ってる間は勉学に専念すると共に、教室を超えた全人的な環境の中で学習するということになるかと思えます。

それから、多くの卒業生がロースクール、メディカルスクールなどの大学院に進み、専門を深める、そして、いわゆる総合大学とは別のカテゴリーを形成している特徴があるかと思えます。

(スライド5)

これは、毎年アメリカで大学のランキングというのがありますけれども、左側に総合大学部門、右側にリベラルアーツ大学部門となっております、別のカテゴリーとして登場します。日本の場合はこういうふうにはなっておりません、先ほどお話したような、国際教養学部などを持っている大学も総合大学部門としてランキングが出ますので、私どものような大学は、あまり数がございますから、なかなかカテゴリーを形成していないと思うのですが、最近は教養教育を重視するところはたくさん出てきましたので、理想としては、やはりグループとして大学のあり方の1つとして安定して人々から認められるようになることが、全体として教養教育を底上げしていく1つの力になると考えております。

(スライド6)

大学の歴史をちょっと簡単に申し上げますと、開学したのは1953年です。ですから、今年の4月に入ってくる人が55年目の入学生ということになります。

ずっとリベラルアーツ教育をしてきたわけですが、当初はもっと少人数だったのですが、ずっと教養学部一学部制です。学部はこの学部しかございません。現在の1学年の定員が620人ですから、4を掛けていただきまして、2500人弱が学部にあります。大学院を併せても3000人いくかないかという規模です。

それから、これは例えばアメリカのリベラルアーツ大学とは非常に大きく違うところですが、アメリカ人と日本人が一緒になって作ったという歴史を背景としておりまして、大学が日本語と英語の両方を公用語としています。これはなかなかご理解いただくのは難しいところもあるのですが、どういう意味かといいますと、授業は日本語で講義が行われる授業ももちろんありますし、全

部英語で行われる講義ももちろんありますが、何がバイリンガルかという、例えば大学が出すいろいろな公式な文書がありますけれども、そういうものはすべて日本語と英語と両方で作らなければいけないということになっております。

それから、学生も入ってくる段階で、どちらかの言語が大学教育を受けるレベルまで達していれば、もう1つの言語は全くできなくても受け入れるという方式になっています。日本人の場合は、そうはいましても英語の入学試験はありますから、それなりのレベルに達した人が入りますけれども、外国人留学生、あるいは帰国学生といっておりますけれども、本当に幼少の時に日本を離れて、あるいは国内のインターナショナルスクールですべての教育を例えば英語で受けてきて、日本語は全然できませんという人であっても、9月生として受け入れる体制を取っています。

その結果、のちほどもう少し詳しく申し上げますけれども、4月に入学する人というのは、今は留学生とか日本人という分け方はなかなかできなくなっているのですが、4月生は基本的に日本語で大学の入口のレベルの教育を受けることができる。英語については、そこまではいいないので、徹底的に英語の教育をしますということで、英語教育プログラムというものを受けます。

一方、9月生は英語で大学の入口レベルの教育を受けるところまで達しているのです。日本語はこの人たちは結構さまざまなレベルですけども、いろいろなレベルの日本語の教育コースが用意されておりますので、日本語教育プログラムを受けます。例えばゼロで入ってくるというような場合には、最初のころはもうほとんど日本語ばかりで、あとは英語で開講されているコースを1つぐらいいやったりという構成になりますけれども、卒業までには日本語でちゃんと大学レベルのレポートを書いたり発表したりというようなことができるところまでもっていく。教育上のバイリンガリズムというのは、そういうことを指しています。

それから、先ほど「理系・文系の垣根を超えた」と書きましたけれども、理系・文系というような区別でなくてもよろしいですが、様々な学問分野間で境界を超えた知識の探求をすること、それからもう一つは、学生が自立的に学修するというのを重視しております。

それで、自慢がかってきますが、「全国大学満足度調査」というのをベネッセがやっているのですが、過去3回は総合満足度第1位（\*講演時点での回数、後日公表された新しい調査結果でも総合満足度第1位となっている一司会者注釈）をおかげさまで取っております。

この総合満足度の中身を見てみますと、学生が一番満足しているのは「教員との距離が近い」ということです。少人数教育なので、単純に割っても教員一人に対して学生何人という比率が低いのですし、もう一つは、あとでもう少し詳しくお話ししますが、例えば、オフィスアワーの制度ですとか、いろいろな工夫をして、学生が身近に我々といろいろな意味で触れ合うことができるような環境を作っています。

(スライド7)

さて、というわけで、このままやっつけてもいいかということになるわけですが、まあ外的には、どこでもそうだと思いますが、例えば少子化であるとか、それから私どもにとりましては、教養学部、リベラルアーツという大学はあまりこれまではなかったのですが、たくさんそういうところが出てきましたので、やはり特色をもっと出さなければいけない。それから、内部的には6つの学科を、あとでお話ししますが、持っておりますけれども、もっと学科の垣根を超えて本来の目的を達成したいということもございまして、今年の4月から新しい体制になります。

この4月から始めるために、ちょうどその1年前ですが、2007年の4月にこの改革は文部科学省に対する届出という形で行いました。届出をするために、その前の1年間は、2006年の4月に私が今いる教学改革本部ができ、具体的に届出をするための準備をいたしました。更にその前の1年間、つまり2005年度をかけて、具体的にどのようなカリキュラム構成にするかということ協議してまいりました。

## 履修の構成

(スライド8)

それでは、履修の構成についてお話ししたいと思います。

卒業に必要な単位数は136単位です。これは実は現在の6学科制度でも136単位なので全体は変わらないのですけれども、中身や内容という面は変わらないのですけれども、組み合わせ方を新しくしております。科目は大きく分けると、全学共通科目というものと専門科目と呼ばれているものに分かれるのですけれども、個人のレベルで見ますと、全学共通科目を47単位、専門科目を89単位、合計136単位で卒業ということになります。

この全学共通科目の中心となっているのは、先ほどお話ししました4月入学生に対する英語教育プログラム、あるいは9月入学生に対する日本語教育プログラムです。

まず、英語教育プログラムのほうから申し上げますけれども、このプログラムは英語を教育することはもちろんなのですけれども、同時に英語を通して大学の導入教育を行うということを目的としております。

したがって、非常に単位数が多い1年生の時は、かなりの時間、この英語教育プログラムの科目を取っていることになるのですけれども、その内容というのは、毎年学内で独自に作るテキストがあるのですけれども、大学で学ぶ様々な分野、例えば生命倫理とか環境とか人種問題とか、幾つかのテーマを毎年このプログラムの教員が協議をして決めます。そして、核となる読み物を選んでいくわけです。それを併せた形で共通のテキストを作りまして、そのテキストの精読、内容分析をするような柱、それから文法の構成などを読みながら学んでいくわけですが、それに基づいて、大学生にふさわしい文章を書く力を付けていくと、そういう柱。それからもう1つは、読んだ内容、あるいは書いた内容をプレゼンテーションするというので、話すという部分を更に組み合わせたような柱、この3つからなっております。

入学式の翌日に、TOEFLを使っておりますけれども、英語のクラス分けテストがあります。4月入学生は英語の入試を経て入って来ますので、9月生の日本語能力に比べますと英語力はそれほどばらつきがありません。一定のレベルから上にはなっているのですが、その人たちにクラス分けテストを受けてもらった結果で、大きく3つのグループに分けています。Aプログラム、Bプログラム、Cプログラムというのですが、Aがその中では一番TOEFLの入口の点数では低かったクラスです。B、Cといくにつれて上がっていきます。免除という人も、まれにはいないことはないですけれども。

この英語教育プログラムは、セクションと言いまして、1学年620人のうち4月に入るのは500数十人前後ですが、その人たちを20人ちょっとの少人数のクラスに分けます。このセクションでとにかく1年間ずっと一緒に勉強していきますので、これが大変に絆の深い学生のグループになって

いくことが多いです。

その後、専門の勉強するようになりましたら、もちろん卒論のゼミで一緒の人とか、あるいはクラブ活動で一緒だった人とか、いろいろところで友達はできますけれども、一番最初の入口で同じセクションに入って、大変に過酷だといわれているのですけれども、厳しい英語教育プログラムをともに乗り越えたという共通経験ができますので、人にももちろんよりますけれども、この英語教育プログラムのセクションのお友達だった人が一番のお友達だという人も多いですね。

いろいろとICU用語というのは変な言葉がたくさんあるのですけれども、この友達のことは、クラスメイトならぬセクションメイトと言われているのですが、これを「セクメ」と申します。そして、セクションで、英語教育プログラムは1年次と2年次もちょっとあるだけですから、それで終わるのですが、しょっちゅうコンパをしております。そのことを「セクコン」と言ったりする。そのぐらい、ある種の絆を作るためには役立っていると思います。

A・B・Cと入口の能力で編成すると申しましたけれども、到達の目標は共通です。大学生にふさわしい勉強していくための力を、英語を通して付けるということにあります。したがって、一番最初の点数が良かったCプログラムに入った人は、標準が22単位なのですけれども、それよりも若干単位が少なくなっています。私どもは3学期制ですが、もしCプログラムだったら、春学期と秋学期が終わったら、冬学期は英語教育プログラムはもうありません。AかBの場合は、春・秋・冬と3学期は1年生の時は出て行くことになります。

それから、2年生の英語教育プログラムは、単位数としては随分減りますけれども、その中心になっているのは論文作成法という授業です。この授業では、人数はやはり少ないですけれども、それぞれテーマを決めて、そんなに大部のものではありませんけれども、参考文献を使って自分なりのリサーチをしながら、英語で論文を書く訓練をいたします。そこで例えば文献表の書き方ですとか、どうやって図書館で資料を探したらいいかというようなことを学び、一定の長さのものを書いて修了するということになります。

3年次から交換留学プログラムに行く場合も多いのですが、外国の大学、特に英語圏の大学に行ったときに、すぐに向こうでペーパーを書かなければいけないことが多いのですが、そのためにも役に立っていると思います。

一方、9月に入学する学生には日本語教育プログラムを行っています。伝統的には、4年間ICUに来てICUで学士号を取って卒業して行く外国人留学生、これを4年本科生と呼んでおりますが、そういうタイプの人が多かったのですけれども、現在はそのタイプの留学生は減っています。反対に、4年本科生の大半を占めているのは、いわゆる帰国学生か、あるいは国内のインターナショナルスクールを卒業した人たちです。

それとは別に、先ほど交換留学生の話をしたが、送り出しの反対で受け入れる学生がいるのですが、1年本科生といって1年間だけICUで勉強する人がいますけれども、その人たちもそれぞれ一番の初歩から上級まで日本語教育プログラムがございます。

帰国学生あるいは家庭で日本語を使っていて、インターナショナルスクールに行ったという人たちは、別立ての日本語教育プログラムがございまして、これを特別日本語と言っていますが、これもA・B・Cと3つに分かれています。ちょっとラフな言い方なのですが、Aに入っている人は小学校程度まで日本語で勉強したことがある人、Bは中学校程度まで日本語で勉強したことがある人、

Cは高校の途中で行ったというような人で、これもすべてクラス分けテストをしております。

こちらも英語教育プログラムと一緒にすけれども、日本語で論文を書くコースですとか、本を読んでその書評を書いてみるというような、そんなような内容になっております。

その他に、一般教育、保健体育、それから「世界の言語」というのは、ICUは英語というイメージをお持ちだと思いますが、フランス語、ドイツ語、スペイン語、ロシア語、韓国語、中国語、以上が現代語ですが、加えて古典語として、ヘブライ語、ギリシャ語、ラテン語を提供しておりますので、そういったような言語を学ぶこともできます。

(スライド11-12)

次に専門科目についてお話しします、これはちょっと、もしかするとお分かりになりにくいかと思いますが、次の例を使ってお話ししたいです。のちほどもう一度詳しくこれを見ますけれども、現在は左側に人文科学科、社会科学科、理学科、語学科、教育学科、国際関係学科と6つの学科があります。

2008年からとどこが違うかといいますと、これまでは入学試験の時に今申しました6つの学科の中から第1志望、例えば社会科学科、第2志望教育学科というふうに、2つ優先順位を付けて志望学科を選んで受験していました。その結果、第1志望合格、第2志望合格ということになったわけです。

これは学科ですから、当然学科ごとに定員もついていました。それを今度どのように変えるかといいますと、入学する時には学科をなくしましたので、ICUの教養学部の入学試験を受けるということになります。

そのときに、将来はこれを勉強したいというようなことは、入試の段階では問いません。それで、のちほどもう少し詳しくお話しますが、では、その新しい体制でどのような専門分野が学べるかといいますと、美術・考古学に始まりまして、一番下の平和研究まで31個ありますけれども、これらの分野を自分の専門として自ら選んで勉強していくということになります。

これは、全く新しいものを今度作ったわけではありませんで、これまで6つの学科の中で勉強することのできたものを、ある意味ではちょっと細かくばらしたといったほうがいいかもしれません。

右側の並びも、現在の人文科学科の中で美術・考古学から哲学・宗教学、社会科学科の中で経済学から人類学まで、それから、理学科の中で生物学から情報科学、語学科の中で言語教育、言語学、それから、教育学科の中で比較教育から心理学まで勉強できるようになっていたのですけれども、これらをばらしたということです。

国際関係学科はどうなっているのだとお思いになったと思いますが、実は今度改組したことの陰の原因がここにございまして、この6つの学科のうち1953年に大学が始まったときにあったのは上の3つで、理学科までです。その後すぐに語学科ができて、しばらく経ってから教育学科ができたのですが、国際関係学科というのは一番後に1990年代になってから最後に付け加えられた6つ目の学科です。

実は、社会科学科と語学科の一部が分かれて国際関係学科になったのですけれども、その結果、例えば、社会科学科の中に経済・経営という専修分野があり、国際関係学科の中には国際経済・経営という専修分野があり、ちょっと変なことになっていたわけです。これは、社会科学科で経済を勉強するときは日本経済を学ぶとか、そういうことではありませんでしたので、長年にわたって学科

を付け加えていった結果できてきた、ある種の矛盾を抱えていました。それを統合して、このように1つの学部の中で分けることにしましたので、整理し直して多少体系化したという、そういう側面もごさいます。

(スライド9)

さて、今見ていただいた専修分野の中にいろいろなものがありましたけれども、これは例ですけれども、生物学と音楽と経済学の開講科目のいくつかの例を並べてみました。

そうしますと、すべてそうなのですが、例えば、基礎、基礎、基礎、基礎、基礎、基礎と書いてありますけれども、すべての分野で基礎科目と呼ばれる科目と、それから専攻科目と呼ばれる科目がごさいます。科目には番号がついていて、基礎科目はすべて100番台です。例えば、基礎生物学というのは「生物学101」とか、そういうふうになっているわけです。

それから、専攻科目は中級程度の科目には200番台の番号、上級レベルの番号は300番台のものがついています。冒頭にも申し上げましたように、小規模ですが大学院がごさいますので、大学院レベルの生物学の講義もありますが、それは400番台になっていますので、学部生も許可を得て取ることもできますが、番号を見るとどういうふうに科目が配列されていて、どんなふうにレベルが上がっていくかということが分かるようになっております。

## メジャー制の導入

(スライド13)

それで、ちょっとまた戻ってきますが、飛ばしまして、例えば、生物学に関心があって入ってきたとします。一番最初に申し上げましたように、全学共通科目から47単位、専門科目から89単位取らなくては行けないのですが、その89単位をどういうふうに履修していくかといいますと、すべての人は基礎科目、つまり100番台の科目を合計18単位修めなければいけないのですが、そのうち自分が生物学を専門にするという場合は、自分で選択した専門分野のことを「メジャー」と呼んでいますけれども、自分が選択したメジャーから6単位分必ず修めなくては行けないのです。

したがって、例えば基礎生物学と動物学概論を、だいたい科目は3単位ですので、2つ勉強したら、生物学の基礎科目6単位という条件は満たされるということになります。

しかし、リベラルアーツ教育の目標の1つは「幅広く学ぶ」ということにありますので、生物学を専修するからといって他のものは何もしなくていいということではありませんので、それ以外のメジャーも100番台の基礎科目を12単位取らなければいけないということになります。例えばこの例でいきますと、基礎生物学と動物学概論は自分の生物学メジャーの基礎科目として取りますがけれども、残りの12単位分を音楽を2つ、経済学を2つにすることもできますし、あるいは音楽を1つ、経済学を1つ、歴史を1つ、政治学を1つ、そういう取り方をすることもできます。

そして、次に専攻科目ですが、これは専攻の勉強ということになりますので、この人は生物学ですから、そうしたら生物学から21単位、ここに並んでいるだけでは21単位にはなりませんけれども、いろいろありますので、こういった科目を21単位の半分ぐらいは200番台、更に残りの半分は300番台の科目を履修するというということになります。

一番お分かりになりにくいかと思うのが、選択科目を41単位ということですが。選択科目というのは何かというと、今お話ししている例は生物学をメジャーにする人の話ですから、生物学の専攻科目

はこの人にとっては専門の科目になりますけれども、自分が選ばなかったメジャーも専攻科目200番台300番台の科目が、生物学メジャーの学生にとっては選択科目という勘定になります。

これも、200番とか300番を勉強するためには、基礎である100番台はある程度条件になりますので、先ほどの自分が選ばなかったメジャーの基礎科目を12単位取らなくてはいけないと申しましたけれども、こういうところで取ってあれば更に選択科目としての、例えば音楽や経済の専攻科目を取るというわけです。

あるいは、一応この21単位というのは最低線になりますので、もっと科目はありますから、生物学を更に勉強したい、あるいは先ほどちょっと申し上げましたけれども、大学院の生物学の授業も許可を得てもう少し勉強したいという場合は、21単位からあふれた分は勘定としては選択科目にいくのですけれども、そこでもっと生物学を学ぶことができます。

それから、先ほどお話しした「世界の言語」で、生物が専門ですけれども、自分は中国語に関心があるので中国語を修めたい、その場合には、初級・中級・上級と科目があり、かなり単位数が取れますけれども、それも選択科目に入ります。

そして最後に、今もそうですが、今後も全員卒業研究が必修になっておりまして、これは単位になります。3学期制ですので、9単位ということは4年生のときに1学期3単位ずつで、計9単位ということになります。

さて、では、この生物なり音楽なり経済なり、ほかにもいろいろありましたが、どの分野を選ぶということはどうやって選択していくかといいますと、まず、先ほど申しましたように、入る前に決める必要はありません。全員が教養学部に入学します。そして、今お話ししたようなメジャー制を導入したわけですけれども、そうしたら1年生に入りましたら、英語教育プログラムを勉強しながら、いろいろな31のメジャー分野の基礎科目が英語教育プログラムとぶつからない特定の時間帯に提供されています。

そこで、この31の中から、これはいろいろな人がくると思いますが、例えば、最初から私は生物学が勉強したいと思って入ってきた場合には、1年生の春学期に生物学の基礎科目を当然取るようになります。それで、その生物学はなるほど自分が考えていたように面白いと思ったならば、秋学期にもう1つの生物学の基礎科目を取ります。そうしますと、基礎科目、生物で6単位というところは満たされますので、迷いのない人の場合は、1年生の冬学期には生物学も専攻科目200番台の科目に進むことができます。

2年になったらまたどんどん生物を勉強し、ほかのものもだんだんやっていくというふうになります。したがって、こういう人の場合には自分の専修分野を1年生のときからまっすぐに勉強していくという、そういう構成になります。

ところが、今のシステムでもそうなのですけれども、例えば、非常に多いケースでは、私は心理学が勉強したいという人が、今オープンキャンパスなんかでも大変多いですが、話を聞いてみるとどうして心理学が勉強したいかという臨床をやりたいということをするわけですね。で、教育学科にみんなだいたい入ってくるのでありますけれども、いざ入ってきて1年生の基礎科目を取ってみたら、なんか統計学というものを勉強しなくてはいけないということで、びっくりしてしまったりするわけです。

(スライド11)

現在の制度では転科制度というのがありまして、どこかの入口で入りますが、線がちょっと細かいですが点線になっているのは意味がありまして。しかるべき手続きを踏んで、例えば、教育学科に入って心理学を勉強しようと思っていたのですが、どうも自分は心理は向かないので、例えば、他のところに移りたいというようなことは今までもできたのですが、それなりの手続きがありましたのでちょっと面倒といえば面倒だったわけです。

しかし、4月からのシステムでは1年生に入ってきて春学期に心理学を取ってみたいけれども、どうもこれは自分の考えていたのとは見込みが違ったなという場合には、次の学期には、ほかに私は何がしたいのだろうと考えて、別の分野の基礎科目を取ることができます。

あるいは、最初に、例えば生物学を勉強したいんだけど、経済学もいいかな、どちらにしようかなと思っている人もいます。今までのパターンでしたらそれはどちらかに決めて、例えば第1志望理学科とか、第1志望社会科学科というふうにしなないといけなかったのですが、迷っている人は迷いを抱えたまま入っていくことになります。

そして、1年生の春学期にどちらから取ってもいいのですが、まず経済を取る、それからその次の学期は生物を取るというふうに、特に1年の間はいろいろな基礎科目の勉強をして、自分には何が適しているかを探索していくということになります。

(スライド10)

それを形の上でオフィシャルに申請する手続きが、2年生の終わりの時期です。これをいろいろなところで話しますと、「最終的に専門を勉強するのは最後の2年間だけですか」というご質問が必ずあるのですが、そういう人もいるかもしれません。最初にお話した生物学の例のように、決めたものは変わらないでどんどんいくということであれば、専門を1年からずっと勉強しているという人もいますし、いろいろと迷ったけれども、2年ぐらいからは固まるという人もいれば、最終的には2年の終わりまでには決まるわけです。

それから、実はメジャー変更期間というものも設けておりますので、4年生に上がるときにやっぱり変わりたいというようなことがあった場合には、先に科目を取り始めることはできますが、オフィシャルの手続きをするのは4年に上がる時ということになります。

先ほどお話ししたようなのを「シングルメジャー」と呼んでいます。このような規則で履修をして、卒業するときは学位は「学士(教養)」1本なのですが、成績証明書にメジャーを書く欄を作りますので、そこに「生物学」というのが出ます。

(スライド14)

ところが、さっき2つ迷っているという話をしました。例えば、経済学と音楽と両方関心があるといって大学に入ってきたり、あるいは入ってきたときにはそうではなかったかもしれませんが、入ってきて音楽の勉強をちょっとしてみたら、経済もいいが音楽もいいと思ったりすると、その場合には「ダブルメジャー」といって2つのメジャーを修める選択肢もあります。

その場合、136単位で卒業するという前提ですと、基礎科目18ということは変わりませんが、先ほどとちょっと変わるの、これですと経済学6単位、音楽6単位を取って、その分それ以外のメジャーからというのは減りますので、6になって合計18です。

それから、生物のときに専攻科目最低21と申しましたが、ということはこの場合は経済最低21、

音楽最低21の合計42単位で、同じ考え方ですので、この選択科目に入るところは、例えばこの人が何か他の経営学の専門科目を取ったり、あるいは「世界の言語」を勉強したりというところで、最低11単位を修めてもらう。

それから、これはダブルメジャーですので、どちらも卒業研究にあたるものを9単位ずつ合計18単位になりますが、さすがに2本卒業論文を書くということは課しておりませんので、このどちらで論文を書くかは個人の選択です。例えば、経済で書くという場合にはこちらが卒業論文で9単位ですが、音楽のほうはその分代わりに9単位分専攻科目、300番台の比較的レベルの高い科目を必修することで9単位を修めます。

(スライド15)

これはちょっと大変ですが、「メジャー、マイナー」というやり方も用意しておりますので、ちょっと変わるのは、基礎科目のところは変わりませんが、マイナーであれば専攻科目15単位でよろしいということになっています。その分、選択科目は多少余分に取れるというか、しぼりが薄くなります。

というようなことが、この履修上のポイントの2つ目になると思います。1つ目は入ってから決めるということで、2つ目はメジャー1つ、2つあるいは「メジャー、マイナー」という選択肢があるということです。

## 学修支援体制

(スライド16)

それで、このようなことをするためには、それなりの支援体制を用意しなければいけないのですが、私どもは従来から「教員アドバイザー制度」というものを持っております。

これは、1年生に入りますと、誰か専任教員がアドバイザーになります。本当は、ちょっと今は一人のアドバイザーが持っている学生の数が多すぎるのですけれども、理想的には本当は20人ぐらいがいいのですけれども、何だかんだで30人ぐらい今は持っています。

(スライド17)

アドバイザーの役割は何かといいますと、最低することは、先ほど3学期制といたしましたけれども、毎学期の始めに履修登録日というのがございます。その日に学生は成績表をもらって、そしてこの学期にこういうふうにとるということを書いてくるのですけれども、それをそのアドバイザーと一人一人面談しながら、この計画でいいでしょうということを決めます。

ここでチェックするポイントとしましては、1学期に何単位まで登録できるかということには上限がありまして、あまりたくさん取ることは許していません。ただし、成績が良ければもうちょっと取ってもいい、逆にいうと、成績が悪いときには単位数をもっと減らさなければいけないというような決まりもございまして、そのようなことも相談をいたします。

これで、最低でもこの教員アドバイザーと年に3回は会うことになります。しかし、本来の役割からいいますと、登録するなどというのは事務的な手続きですので、そういう日だけに会うわけではなくて、しょっちゅう会って、個々の学生がどんな履修を計画していて、どんなことをしたいと思っているかというようなことをよく聞き、学生の側からいけば助言を求めてもらって、日常的な交流を通して支援するということが目的です。人によりますけれども、自分がアドバイザーとなっている学生を集めていろいろな会をしたりとか、というようなこともしております。

それから、三番目はこのアドバイザーというのが、何をすることも推薦状を書いたり、サインをしたりしなければいけない仕組みになっておりますので、いろいろな問題が起こったり、問題がなかったとしても何か必要があったときに相談に行きます。具体的には、例えば、奨学金が欲しいという場合にはその推薦状、交換留学をしたいという場合にはその推薦状、また就職や大学院進学などのときも、基本的に推薦状を作成するのはアドバイザーの役割です。これは今後も続けます。

ただ、今度新しい体制になりまして非常に大きく変わることは、これまでは学科の枠がありましたので基本的に自分の学科の学生のアドバイザーになる、私でしたら語学科の学生のアドバイザーになる、というのがほとんどです。それでもやはり6学科で定員の数が多い少ないので、違う学科の教員がアドバイザーになっているということもありますけれども、大半は学生と教員の学科が合っているということでした。

しかし、新しい制度では入る段階では分からないわけですね。何を勉強したいと思って入ってくるかということは一応聞きますけれども、それを見てアドバイザーを割り振るということはどうもしないということにいたしましたので、どういう学生が自分の下に来るかは、来てみないと分からないという世界に4月からはなるわけです。

しかし、基本的にアドバイザーがすべきことというのはこういうことですので、必ずしも専門分野の話をするのが目的ではないわけです。大学生生活全般の支援をすることが、こういう個人の教員アドバイザーに求められていることですので、とりあえずは、誰が誰に当たるかは分かりません。しかし、メジャーを描くためにはそれなりにそれぞれの分野の情報を与えることも必要になりますので、新しくアカデミックプランニング・センターというものを作りました。

(スライド16)

これは、アドバイザーのアドバイスという言葉と、プランニングのプランという動詞の違いに、性格の違いを込めてやったつもりなのですが、アドバイスするというのは主体が教員であって教員が学生にアドバイスするということですが、プランは私のプランを立てて、あなたこういうふうにごらんくださいというわけではありませぬので、プランするときの主体は学生自身です。

したがって、プランニング・センターに行くとなんが分かるかということ、自分がこの分野に関心があるなと思っている分野の概要が分かります。ここは、教員のセンター長が1人、それから専従のスタッフが1人、それから「特色GP」がおかげさまで採択されましたので、それでもう1人スタッフを雇っているのですが、ここに行くとなんがそれぞれのメジャーについて関心がある場合に、電子的なデータでも見ることもできますし、紙メディアのファイルで見ることができてもできますが、基礎的な情報がすべて分かります。

今言ったようなスタッフが相談員としておりますので、もう少し詳しい話が聞きたいという場合には相談をするわけです。そうしたら、例えば生物学をやってみたいのですけれども、というので基礎的なことをここで一応情報を得たら、「そういう分野をやりたいんだったら、何々先生にアポイントメントを取って話しにいくといい」、あるいは「何々先生のオフィスアワーに行ってみるといい」というような交通整理をするのが、このセンターの役割です。

同時に、センターの責任でそれぞれのメジャー説明会をいたします。具体的には、4月のオリエンテーション期間中に最初の説明会をし、それから9月生が入ってきますので9月にもう1回やり

ますけれども、もちろん4月生も春学期、1学期終わったところで行ってみると、また違った意味があるかと思われまます。

それから、ごめんなさい、1個飛ばしてしまいましたが、5月の中頃に1泊形式でリトリートと呼んでおりますものもあります。これまでは学科ごとにやりましたが、来年は約500人の学生が入るところを探すのが大変でしたが、八ヶ岳に行くことに決まりました。1泊2日形式で1か所でやりますけれども、これは別に勉強のことだけを考えることが目的ではなく、そこでもメジャーの説明というのはそれなりにいたします。

(スライド18)

これがプランニング・センターで、これが教員アドバイザーですけれども、そうしますとこれまではアドバイザーがいて学生がいるということで1対1の関係でしたが、これで三角になるわけです。

そこで、教員アドバイザーとプランニング・センターというのは役割の住み分けがそれなりにありますけれども、教員アドバイザーのところに書いてあることはもちろんこれまでと同じです。先ほどご覧になった1枚前のスライドと同じことが書いてあります。

教員は授業もごぞいますし、会議もありますので、年がら年中オフィスにいるというわけではありませんが、1週間に2コマ分必ずオフィスアワーを設けることになっています。そのときは必ずオフィスにいて、誰がきてもよろしいということですので、もちろんアドバイザーのところに相談に行くというので、自分が担当している学生もおります。これは誰が来てもいい時間なので、ちょっとその分野に関心があるのですけれども、というような人がオフィスアワーに現れます。

一方、アカデミックプランニング・センターは9時から5時までというような一定の時間はありますけれども、昼休みもありますし、基本的にはいつでも行くことができます。ですから、ここがやっていることは、先ほどお話ししたメジャー制度の周知徹底をするためにいろいろなデータをまずは用意しておいて、基本的なことを説明する。それから、具体的な相談にも乗りますので、「私はこういうメジャーにいきたいんだけど、何をしたらいいでしょう?」というようなことに対して応えていきます。それ以外にも、留学をしたいとか、いずれは大学院に行きたいんだけどどうしたらいいか、というようなもう少し広い相談なのですが、それに応じるのも役割となっています。

(スライド19)

更に、どこでもそうだと思いますけれども、今はいろいろな悩みを抱える学生も多く、カウンセリング・センターですとか、あるいは就職について相談をしたいという方は、就職相談グループで、留学は、先ほども申しましたけれども、国際教育交流グループ、あるいは障がいを持っている学生の支援などは教養学部長室が担当しております。周りにこのようないろいろなオフィスがありまして、その関係を取りながら学生を支援していくつもりなのですが、その中心としてプランニング・センターを考えております。

そして、実はこのスライドにはちょっと載せなかったのですが、もう1つ新しい試みとして、入学する前から卒業直前までに、今後入ってくる学生には、5種類の「アカデミックプランニング・エッセイ」を書いてもらうことにしています。

1つ目のエッセイは、入学が決まった学生に対して3月に出してもらうことになりまますけれども、ICUで何をしたいか、これはそのうちに変わってもかまわないですけれども、一応その時点ではこ

ういものをメジャーにしたいというのを3分野書いてもらって、勉強に対する抱負、それから様々な課外活動もありますし、留学をしたいというようなことを書く人もいますし、将来への展望を含めて最初に書いてもらいます。

これは、そんなに大層なものではありませんけれども、一応、入口で書くものです。それを、どうしても紙で出したいという場合には紙で出してもらいますが、専用のウェブサイトを作って、そこにアクセスすると流し込める形のページを作ってありまして、それに書いて送ってもらうということを考えております。それをサーバーを置いておいて保管することになります。それを保管するのもアカデミックプランニング・センターです。

これは、その学生がプランニング・センターに現れたら、それを取り出してきて「ふむふむ、きみは何をしたいの」ということになるわけですが、例えば、アドバイザーが見たいというような場合にも、一定の制限を設けてアクセスできるようにするつもりです。これが1つ目のエッセイです。

2つ目のエッセイというのは、1年生が終わるところで書いてもらう予定です。それは、入る前に書いたものをもう一度自分で読み直して、今の時点で大学生活に何を求めているか、何をメジャーにしたいかということ振り返って書いてもらいます。これは、大きく変わるという人もいますし、予定どおりに進んでいる人もいますし、それが2つ目です。

3つ目は、先ほど申しましたように、オフィシャルに全員がメジャーを申請するのが2年次の終わりですので、その時期に自分はなぜこのメジャーを選択するのかということを書きます。

アドバイザーは、先ほど申しましたように、1年に入ってくるときはランダムに振りますけれども、3年生でメジャーが決まった段階でメジャーの担当の教員に変わります。ただ、今もそうなのですが、アドバイザー制度というのは個人的な関係なので相性というものもありまして、どうしてもちょっとというようなこともあります。その場合は、希望で変更ができるようになっていますので、3年になるときにメジャーの分野のアドバイザーに変わるということが大原則ですが、例えば、1年の時にランダムに当たった人が大当たりで、この人でいいというふうな場合には、変わらないという選択肢もあります。エッセイとしては、そのときに書くのが3つ目になります。

それから、4つ目は、更に3年が終わって卒業研究に入る前に、メジャーも決まってそこで卒業研究をするわけですが、卒業研究の展望を書いてもらいます。こういうものを、メジャーの中でも誰をアドバイザーにするかというようなときも参考に読むことにしております。

5つ目は何かというと、いよいよ卒業というときに、4年ではない人もいますけれども、ICUでの生活を振り返って、将来の展望と共にどんな学生生活だったかということを書いてもらう予定にしております。これらを全部ポートフォリオ化して保管するというを考えています。ただ、まだ学生も入ってきておりませんので、これは具体的にこういうことがあったということをお話できるのは先のことになります。

(スライド20)

これは、授業をしている本館という建物になりますが、3階建てのあまり高くない建物の屋上から、キャンパス全体を見た写真です。

1時間お話ししましたので、もしご関心があれば、あとちょっと入試の話もするかなと思って、スライドはついておりますけれども、ここまでについてもご質問がおりかと思っておりますので、いったんここでやめます。

## 質疑応答

**【照本】** 質問へのご配慮をいただきまして、ありがとうございます。

私自身も触発されるようなお話を幾つも伺えました。貴重な時間ですので、さっそく質疑応答に入らせていただきます。

**【フロア（伊藤進）】** 大変興味深いお話、ありがとうございました。実は私の息子がICUの卒業生で、大体の様子は聞いていたのですけれど、今のお話を聞いていてちょっと私自身よく分からないので、単純な質問かもしれませんが、2つお聞きしたいことがあります。

1つは、このように科目をみんなバラバラにしてしまうと、時間割をどういうふうに作られているのか。つまり学生はどれを取ってもいいことになるわけですので、そうすると、たまたま取りたい科目がぶつかって、なかなか取れないというようなこともあるんじゃないかと。このあたりについてどういう観点で時間割設定されているのか、というのが1つ。

それからもう1つは、教員の立場からすると、このようにアドバイザーとかアカデミックプランニング・センターというようなものを作られて、学生に対する4年間の学修生活についていろいろ指導されているのでしょうか、学生の自発性をICUは重視されているわけですので、そうすると、先生の立場からすると、偏りが出るんじゃないか。例えば、A先生のところには、ワアッと集まるけれども、B先生のところにはなかなか集まらないという、そういう場合、学生が集まる先生のほうはよろしいんでしょうけれど、集まらない先生の場合を、ICUでは考慮されているのかどうかという点をお聞きしたいと思います。

**【日比谷】** まず、時間割は、もちろんこの時期ですから、4月からの時間割はすべて決定しておりますけれども、これを決めるのはもう大変なバトルでございました。一応収まっているのですが、時間割に枠という考え方を使っております。

まず3学期制ということは何回も申し上げたのですが、すべての授業が学期完結型ですので、原則は70分の授業を、まあ演習とか実験とかいろいろありますけれど、普通の講義科目だったら、70分の授業を週に3回やって210分で3単位になるのですが、その3回をどういうふうに教えるかということに、いくつかのパターンがあります。

基本的にこの3つをばらして教えるというタイプの組み方のものは、全部午前中に入れてあります。それは横組みと称しているのですが、月水金の午前中1時間目・2時間目・3時間目とありますが、そのどこかに月水金、月1・水1・金1みたいなものがあるというやり方があります。

それから、これはELPとの兼ね合いで出てくることなのですが、ELPとは英語教育プログラム（English Language Program）のことですけれど、1年生はそのしぼりが非常に大きいので、英語教育プログラムが入っている時間帯というのがすべて決まっているのです。それで、逆にいうと、それがなくて1年生向けの基礎科目を集中的に入れるということになります。それが、月水金の3時間目か、あるいは火曜の3時間目と木曜日の2時間目・3時間目を縦に並べた組み合わせなのでですね。

それから、1限目はどこでもそうかもしれませんが、あまり人気がありませんので、月水金の1限であれば、どんなタイプの科目であっても、もう1限目でやりたいと言ったら、「はい、どうぞ」ということになります。

それから、長年に渡って70分のブロックを組み合わせる形で時間割を組んでいたのですが、

数年前に70分だとちょっといろいろなタイプの授業の形態には不具合であるという意見が出てきました。

例えばビデオを見てからディスカッションをすとか、いろんなことを考えるといます。実習がある。そうすると、70分でなんかビデオを見ているうちにずいぶん時間が経ってしまって、いざディスカッションするともう尻切れとんぼみたいなことがよく起こるようになりましたので、そういう一定の長さを必要とするようなものができるように、210を2で割っているだけですが、105分を週に2回やるという組み合わせもできたのです。例えば月木と水金みたいなプランです。そうすると、今度はそこに、割とそこは込み合うので、科目の種類について200番台のものを中心にやってください、かつ、何かディスカッションをすとか105分が必要だというものをやってくださいと。

それが4時間目といわれる時間に入っているのですが、なんか何でもそういうふうにとちょっと英語を使うのがバイリンガル大学の特徴かもしれませんが、70分しかコマがないところは「コマ、コマ」と言っていたのですが、105分が導入されたところで、それをスーパー時限と大学側は呼んでいたのですが、いつのまにか学生は、それを「ロング」と言うようになったのです。だから、4時間目は要するに「ロングフォー」、略して「ロンフォー」と言われておりますが、その時間帯に200番台を中心に、ある程度長さが必要なものが入ります。

その後ろの5時間目から、5時間目・6時間目、実は7時間目というのものもあるのですが、これを縦に並べることを「ゴロチ」と呼んでいるのですけれど、ここに演習形式の授業を入れる。

それから、非常勤の先生は週に三日分いらしていただくということは到底不可能ですので、1日まとめたいとなると「ゴロチ」になっていることが多いです。しかし、先生のご都合もありますので、その場合はこういう原則を外れて、まあ1・2・3じゃないとだめだという場合には1・2・3に組んでいるケースもあります。というのが、時間割です。

それで、まあそれで組んでみると、もちろん基礎科目は決まった時間帯にいろいろな基礎科目が出てきますから、その中から選択をすということにはなりますけれど、まあ3学期ありますので、すべての選択が全部大丈夫というわけにはいきませんが、それなりに基礎科目が取れるようにはなっています。

ちゃんとチェックしてありまして、メジャーごとに基礎科目が1年生に取れる時間帯に出ていない場合には、それをチェックするのが秋頃の本部の大仕事だったのですけれど、これではだめですからと言って、戻していたわけです。まあいろいろなやりとりがありましたけれど、正統な理由がないものについては、1年生枠に入れ直してもらおうということを言っています。これが時間割ですね。

2番目の人の集中というのは、実は現在でもございまして、今も学科単位で卒業研究に入りますが、その卒業論文指導の教員というのは一応希望を出して、面談もして、いろいろな試行錯誤の後に決まるのですが、現在は学科ですので、学科によって若干考え方は違いますが、一応この学科としては1人で持てる上限は何人までというようなことを決めているところもありますので、多すぎるところは少ない人で全然分野が別なことになるとちょっと難しいのですが、多少動いてもらうというようなことをしています。

そうすると、今度はメジャーの教員が集まって、あまり1人に集中しないようにということを相談することはそれなりに可能ですけれど、でも現状でも結構多い人と少ない人の差はありますので、その辺をどういうふうに解決するかは、まあ1つの課題ではあります。

**【フロア (山本)】** 教養部の山本と申します。1つだけ質問をさせていただきたいのですが、先ほどプランニング・センターという話が出ていたのですが、それは先生が所属されておられる教養学部とは独立の組織と考えてよろしいのでしょうか。

**【日比谷】** プランニング・センターですね。中にあります。

**【フロア (山本)】** どのぐらいの、どういうふうな運営形態になっているのでしょうか。

**【日比谷】** 今はまだ始まったばかりですので、学部長の管轄下にFDオフィスと、それから、このアカデミックプランニング・センターと、ほかにもいろいろなものがありますが、その中の1つになっています。

先ほど申しましたけれども、プランニング・センター長というのは、心理学の教員が今はたまたまなっています。あとスタッフが、専従のスタッフが1人と、嘱託スタッフが1人当たるところまでこの間申し合わせましたけれども、始まったらだんだん込んでくるわけですが、今考えていることはプランニング・センター協力教員みたいなものを、まあ一定の例えば2年というようなことで切って、そして、センター長は授業もありますけれどもかなりの時間、このプランニング・センターに在ることになります、協力する教員というのが週に2コマ持つべきオフィスアワーの1コマをプランニング・センターで持ってもらおうというようなことを考えています。

**【北川学長】** 先ほど1コマが70分で週に3回、それで3学期制ですから、10週ということになりますか、それで3単位でしょうか。

**【日比谷】** そうです。

**【北川学長】** アメリカの大学では60分で週に何回もやるというのが結構多いと聞いております。日本では、まあ例えば90分とか100分で週1回。先生としては授業効率としてはどちらがいいとお考えですか。

**【日比谷】** 105分の枠を作ったということも関係があると思いますが、何分が適しているかは、実は分野によると思います。

今回も70分でほとんど組んでいるところも、例えば数学とか経済学等もそういう傾向が高いですが、例えば数学の場合はもう105分もかなりとんでもないこと、縦組みなんてありえないと言っていますけれど、ある種の集中力が続くためにはここまでというようなこともあったのです。

一方、例えば歴史のような分野は、実際に文書を見ながら、たぶん上級のコースになりますけれども、やっていくというようなことで、70分では到底終わらない。あるいは、英語の歴史を勉強する科目は幾つかありますけれども、それなども例えば古英語なら古英語のテキストをまずは読む、それから、それについての講義をするというようなことだと、それはセットになって講義で、例えば「月曜日に70分テキストをやりました。それで、水曜日にじゃあそれについての講義をします」というようなことよりは、105分で、それがその一定量バランスが良く入っていたらいいというので、そこに入れたいというような話がありました。

それから、社会学などでも調査系の授業なんかもあるのですが、調査の計画を練るというような段階、あるいは実際にやったことを報告するというような段階でも、やはり長い時間の方がいいということもありますので、まあどれがいいかというのは、分野の特性にもよるかと思います。

私は個人的には70分が好きなのですが、好みもあると思います。

**【フロア (安村)】** 学生がゆっくりと時間をかけて自分に一番あったメジャーを選んでいくという

システムは、素晴らしいと思います。

私どもも今度、国際教養学部でドイツ語・フランス語・ロシア語・中国語・スペイン語と、ある種の「メジャー」を選ばせるのですけれども、それをまあ早く選ばせて早く勉強させたいという気持ちがある一方で、当面は4月の段階で選ばせるということになっています。先生は言語のことについてもお話しされましたが、こちらも最初から選ばせるのはなかなか難しいだろうなあという気もしているので、何かアドヴァイスがありましたら、お聞かせいただきたいのですが。

**【日比谷】** 今おっしゃったような言語は、たぶん大学に入って初めて知るといようなものが多いと思うのです。私どもの場合は、そういうタイプをメジャーで選ぶことはこのシステムではありませんのであまり問題はないのですが、似たようなものはサイエンスの分野ではいくつかあります。分野もさっき性質によって授業もふさわしい時間数も違うということを申しましたけれども、明らかに積み上げを要求する分野と、あまり積み上げをしなくてもいい分野とありますよね。そうすると、この自由にじっくり考えて2年の終わりに選べばいいというシステムに対しても、積み上げを要求する分野の教員からは、もう猛烈な反対があったわけです。それで、これをやりたいのだったら早めにメジャー申請させたほうがいいのか、いろいろな意見がありましたし、今でもそれはあります。

そこに答えるのが、1つはプランニング・センターが企画するメジャー説明会で、しっかりそういうことは説明してくださいよということです。だから、入ってくる時点で積み上げが必要な、例えば物理学がどうしてもやりたいという人の場合には、1年生の春学期にはほかに興味があるものがあるかもしれないけれど、これが優先順位が高いのだったら、ぜったいにこの基礎科目を取ってくれないと次が困りますよというようなことは、言うことにしています。

なので、もし自由になさるのであれば、ただ、私は例えば今おっしゃったような言語を選ぶというようなことだったら、慶応の藤沢がそれをやっていると思いますが、まあ前期・後期制ですが、1年の前期は探索期間でいろいろなところ、ランゲージハウスとかいっていたと思いますが、に行ってみて、少なくとも秋から始めるぐらいの探訪期間はあってもいいかなと思います。ただ、なかなか大学の4年間で一定のところまでいくというのはかなり大変なことです。言語も積み上げを要求しますから、その意味ではもう最初にこれをやるのだったら早くからというのが多いかと思えます。

**【フロア（赤坂）】** 教養部で地理学を教えています、赤坂と申します。

非常に先生方がきちんと対応されてこういうプランをお作りになっていると思うのですけれども、なんとなく先生方の負担が大変かなあと思っているのです。その先生方の持ちコマといいますか、ノルマがどういうふうになっているのか。3学期をみっちりやると、疲れちゃったりという、それを何年もずっと続けているとどうなるのかなあ私なんかは思っちゃうのですけれども、サバティカルリープとかそういう先生方のリフレッシュする期間がたぶん保障されていると思うのですけれども、どのようになっているかちょっと教えていただければ幸いです。

**【日比谷】** まず2つ目のご質問からお答えしますと、リープの制度は日本では大変に珍しいと思いますが、原則として丸6年を教えると1年もらえるというシステムになっています。

これはちょっと非常に複雑なICUの内情も絡んでいるのですが、伝統的には日本人の教員と日本人以外の教員は、ちょっと違ったのですね。どうして違ったかということ、日本人以外の教員は外国からいろいろな理由で、日本は専門だという歴史の人とかいますけれども、まあ来ているから、も

う少し短いサイクルでリープがあって本国に帰れることもいいのじゃないかというようなこともありましたので、日本人は6年務めたら1年取るのだけれども、外国籍の教員の場合は4年務めて2学期取るというような、ちょっとサイクルが早いようなやり方をしていたのです。

しかし、このごろ随分変わりました、例えば外国籍の教員というのも、今や外国に帰る家がないといった人もいますのですけれど、もうすっかり引き払って自分は日本に来ている、あるいは日本人が家族であったり、いろいろなケースがありますけれども、そういう違いを設ける積極的な理由がなくなってしまったので、ちょっと取り方も変わってきているのですが、原則は6年教えたら1年とお考えください。

実は私は、他大学からICUに2002年の春に移った者ですが、移るときにリープがあるということを実に楽しみにして移りました。しかし、役職に就くと、そういうものは役職を優先しろと言われるので、本当は来年が私は6年経ちましたので、めでたくリープのはずだったのですが、それはなんかどこかに消えてしまった。

それで、貯金はできないのですね。要するに、12年働いたから2年もらえるとというふうにはなっていないのです。ただ、私は6年丸ごとやっていますから、今はもう権利保有者のリストには載っています。そして、これを終わると非常に高い順位にいるはずなので、そうしたらあると思います。それが1つ目の質問です。というわけで、疲れたのをリフレッシュする目的がありますので、この制度はぜひ大事にしたいという、共通の理解があるかと思えます。

たいへんいい制度で、その1年の間にそれをどういうふうに使っているかというのは、人によって違いますが、論文を書くとか本を書くとか、いわゆる研究に使う人もいますのですけれども、大変に教育熱心な大学だということは私も移って非常に感じました。教授法の開発ということに関心のある教員もまあ全員ではないですけれども、それなりにいますので、そういったことにそのリープの期間を使っている場合もあります。

ただ、おっしゃるとおりアドバイザーの仕事も結構大変ですし、それから、これはありがたいことだと思いますが、学生はいろんな学生がいますけれども、一番最初に申し上げた郊外にあって全寮制ではないですけれども、1回大学に来るとあまり遊びに行くところがないので、なんか結構1日中大学生はいるという感じなのです。

そうすると、何かしょっちゅう学生が来るし、そういう意味ではなかなか忙しい。それから、今度の改革で今日はカリキュラムのお話でしたけれど、やはり会議だとかが本当に多くて、それも大分整理しようというようなことをしたのですが、まあ先生方はどういうふうにお考えか分かりませんが、割に会議が好き人が多いのですね。ですから、私が望んでいたほどには減らせませんでした、まあ減らす道筋を多少作ったかなという感じです。ただ、まだかなり負担が多いです。

持ちコマにつきましては、原則として年間に、まあ105とかいろいろなケースがあるのですが、単純化してみますと、70分掛ける6を1学期とする。それで、標準的だったらそれが3単位の科目2コースになるのです。そうすると、年間に6コース教えると。しかしながら、これがこれまでは随分ばらつきがありまして、学科によってはそれを5しかやっていないとか、あるいは人が足りないというようなことがありましたけれども、8になっているというようなこともありました。

それで、完全にそれを綺麗にすることはできなかったのですが、今回は一からカリキュラムを作りましたし、届出書類の関係で誰が何を担当するというのも、実際には動き始めるとそのとおり

にはいきませんが、チェックするのに絶好の機会でしたので、この原則が極力守られているようにということは心掛けました。

さらにこれはまた先の話なのですけれども、一応目標として掲げていることは、この6つの科目を年間に持つ場合に、科目の種類を考えていまして、今日は一般教育のことは全然申しませんが、必ず一般教育科目も全部専任が持つことになっています。多少はどうしても足りなくて非常勤の先生も入っていますけれども。したがって、どんな分野の人でも一般教育を教えるのですが、専門分野の基礎科目との違いはどこにあるかという、基礎科目はその分野の体系を学ぶための基礎をやる場所ですが、一般教育科目というのは、むしろ個々の分野と他の分野のつながりをみるところだというような言い方をしていますので、ちょっとまあやる内容が違う。

そうすると、目標としては必ず全員年間に一般教育科目を1つ、それから大学院は担当がない教員もいますけれどもほとんどがありますので、大学院の科目も1つ、残りの4つをできれば100番、200番、300番をちゃんとばらつかせて教えてくださいよということは言っています。300番台しかやらないというような人をなくしたいということです。

これは、なかなか人によって希望もありますけれども、ただこれからはメジャーに引っ張って行くということが非常に重要になりますので、メジャーに引っ張るにはやはり100番台にエースを投入するという発想になりますので、まあできればみんながエースになれることがいいわけですが、100番もちゃんとローテーションをして、基礎科目と専攻200、300番をできればまんべんなく教えてほしいと思っています。

**【フロア（赤坂）】** 最後の持ちコマのことと、あるいは先生方の学生指導との関わりで、あと1つ質問させていただきたいのですが、中京大学では基本的には専任教員1人で、企業ですと、変な言い方ですが、社長兼末端の社員まですべての仕事をやっているのですが、先生方の教育研究に対するサポート支援体制がどうなっているか、ちょっと教えていただければ幸いです。よろしくお願いします。

**【日比谷】** それはTAとかそういうことですか。

**【フロア（赤坂）】** それとか、助手なり副手なり教務の方とか。

**【日比谷】** これまでは、非常勤助手・非常勤副手という制度があって、大学院生にやってもらっている部分があったのですけれども、その制度にはいろいろ問題がありましたので、これを機に改めることにいたしまして、正規のTA制度を4月からは導入します。

TAは、個々の授業の中で、TAが代わりに教えるということは許していませんけれども、例えば小さいグループに分かれて授業の中でディスカッションをするというようなときに、専門分野のTAであればそのディスカッションリーダーになって一緒に教室を回ったりすることができますので、そういう仕事をしたり、単純な採点をしたりというようなことがTAはできます。

これまでそういう何ていうのですか、ある程度の専門性が要求されるものと、コピーをするとか、それから先生方もいろいろな機材を使われると思いますが、その機材のセットをするということが、何となくぐちゃぐちゃになっていたのですけれども、後者のような仕事は授業ヘルパーとって、そんなに専門的な知識が必要なわけではありませんので、ある程度ヘルパーをプールしていて、その人にやってもらうというようなことを考えています。

それから、あとは総合学習センターというところがあるのですけれども、コンピュータ関係につい

ては、そこがサポートしてくれるようになっていきます。

ただ、どこでもそうだと思いますけれども、私どもの大学は小規模ですし、スタッフの数も決して多いとは言えませんので、まあものすごく十分とは言えないと思います。社長兼務というのはある程度、当たっていると思います。

**【北川学長】** 先ほど卒業生の単位136単位とおっしゃったんですが、本学では数年前に、文科省の指導だったかで、124単位にそろえたんですが、その点先生いかがお考えですか。

**【日比谷】** 届出書類に136と書いて出しましたがOKになりましたので、よかったんですね。ただ、なんかこの話も半分冗談だと思いますが、124で卒業できるから、その124を取った学生が大学を訴えたら負けるという話をちょっと聞いたのですが、まあ今のところそういうことは起こっていません。

**【照本】** 限られた時間のなかで、質疑応答にも大変丁寧にお答えいただきましてありがとうございました。私自身は一般教育科目と専門科目それぞれの中の基礎科目のおさえ方に関心を持ちました。

入試制度と一般入試についてもお話の準備をさせていただいていたのですが、予定の時間がきてしまいましたので、これで日比谷先生をお招きしての講演会を閉じたいと思います。

日比谷先生、貴重なお話をありがとうございました。

**【日比谷】** どうもありがとうございました。

**【照本】** それでは、閉会にあたり、教養部長の鷲見先生からのご挨拶をお願いいたします。

**【鷲見教養部長】** 教養部長の鷲見です。簡単に挨拶をさせていただきます。

この4月から国際教養学部改組して、ようやくスタートできるかなというところに来ています。スタートしますと、いろいろな改善点等々が出てくると思われれます。こういった際に、今日、日比谷先生からお話いただきましたいろいろな点が参考にできるかというふうに思っております。貴重な示唆となって、私ども中京大学の新学部へのおみやげと申しますか、プレゼントになったのではないかというふうに非常に感謝しております。

今日は、先生、どうもありがとうございました。

また、お忙しいにもかかわらず、皆様方にはお時間をさいいただきまして、参加していただきましたことを、この場を借りて御礼申し上げます。ありがとうございました。

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*